

官尊民卑の傾向について

田 木 繁

それぞれの期間を通じて、私はプロレタリア何々と銘打ったいくつかの機関誌への投書詩人の一人であった。(今日、依然として私が雑誌「新日本文学」への投書作家の一人であると言う意味で、私の地位はその後にも改善されていないが) 雑誌の出るたびに、私はまっさきに詩欄を開く。指先とともに、目をいそがしくあちこちと動かす。が大抵の場合、ちゃんと締切日までに送った筈の私の原稿が載せられていない。そのときの私の胸内をかきむしる絶望を、誰が知るであろうか? 私の原稿はやはり編集者を動かすに足らず、紙屑籠の中で、悲運をかこっているに違いない。時には私は私の詩を、人目につかない片隅に、埋草がわりに見出す。そのときの私の心のみじめさも、ボツにされたときと変りはない。同じ詩でありながら、他の堂々と詩欄を飾っている作品と比べて、どうして私の作品はこのような待遇を受けねばならぬのか? わけても私はそれらの雑誌における一人の詩人の作品に、私の作品を突きつけてみないわけに行かなかった。その詩人の作品は必ず巻頭に、二頁見開き、カットつきにして掲げられていた。巻頭と埋草と。これが評論や小

説であるならば、一旦発表される限り、同じ体裁に組まれ、こんなにひどい差別待遇はないに違いない。がそれが原稿紙一枚か二枚の短い形式であるために、最もはなやかに扱われるか、最もみじめに扱われるかである。営利雑誌や投稿雑誌における場合ならいざ知らず、かりにも組織の機関誌と銘打った雑誌に、こういう事実が行われたとすると、それは作者の矜持に甚しくこたえ、自分の作品について、再省三思の機会を与えられないわけに行かぬ。

その人の作品に比べると、なるほど私の作品は甚しく見劣りがした。第一語彙が豊富でない。調子がリズムミカルでない。到底飾り物になりそうにない。編集者のとりあげなかったのも無理はない。それに反し、その詩人はいつも泰然自若としていた。音吐朗々としていた。何か作品を頼まれると、すぐにそりくり反り、同じ調子で、余韻條々たる作品を書くことが出来た。が私は、そういうわけには行かなかった。私のそのときどきの作品も心頭の怒りから発し、山頂から飛びおりるような決意で筆をおろすのであるが、その結果はいつもギョギョなく、スムーズに行かない。殊にそのときの激情の深

人として、吾々の内部に残っていない。それは苛烈な反動時代を生き抜く要素を内部に持っていなかった彼等として、当然の運命であろう。が一般概念依存主義の傾向は、なおも吾々の内部にあるように思われる。いやそれどころか、新しい時代の始まりとともに、又もや頭をもたげて来そうに思える。そして、それが外ならぬ感慨派、詠歎派の母胎をなすものである以上、それに対する私などの態度を一通りハッキリさせておくことが、この際必要なことに考える。

私は大体人々の自足した顔つきと言うものを好まない。一定の概念に自らを托して、安心している境地を諒解することが出来ない。真理と言うものは絶えざる自己嫌悪、倦まざる自己脱皮、昨日の自分を身の毛のよだつほど嫌う今日の自分の中にこそあるように思われる。ところで、近頃になって又、如何なる難問題をも一手に引受け、立所にほぐしてみせる魔術不思議の神通力をえとくした人々が、私の身辺にも現れはじめたように見える。

立場は正しいが、説得の仕方が不十分だと言う言葉がある。そんなに横殴り式に批判しては駄目だと言う言葉もある。が事実は、そんなに横殴り式にしか批判し得ない彼等自身でないか? 不十分にか批判し得ないくせに、立場だけを後生大切にしがまえている彼等でないか? その後生大切にしがまえている立場の故に、一歩も前進し得ない彼等でないか?

まず大義名分を明らかにせよと言うこともいわれる。が大義名分だけを明らかにしたところで何になるか? 事実、錦の御旗は彼等の手の内にあるかも知れぬ。が今日に於ては、もはや錦の御旗だけで、勝敗の数を決定的にすることが出来ぬ。こう言う日本に特有な官尊民卑の傾向が、それと対蹠的であるべき曾ての吾々の組織の中

今日に於ては、もはやかの大言壮語派、余韻條々派の詩人は、一

浅により、甚しい出来不出来がある。到底かの詩人のように、いつでも同じ調子、余韻條々とは行かない。がひるがえって、その内容はどうかと言う点になると、その詩人の作品からは与えられるものは何もない。なるほどこれは詩だ、美しいと思うだけで、好い気持ちになり、夢見心地になることに終る。人間の生き方について、それへの覚悟の仕方について、何物かを付加すると言う段になると、私の作品の方が遙かに立派だと言う感じを、いくらかの自惚れも伴いながら、当時私は抑えることが出来なかった。そこで、ブルジョア詩の領域に於てならともかく、吾々の詩の領域に於ては、何よりもこのことが大切だと言う見解に立った私は、ただこの詩人に対する抵抗からだけでも、私の詩作を生涯継続してやろうと言う決意を、ますます新にするのであった。

私の分析に従えば、この詩人の作品は、常に一定の英雄主義的な、或いは人道主義的な通念の上に立っていた。この通念は彼にとつて疑うべくもないものであり、それからさきの彼の努力は、専ら詩語の精錬、修飾に向けられていた。が私にあっては、努力は専ら、この一般的な概念を越えた、時にはそれに反した観念を、自分の肉体を以て発見することに向けられて居り、新しい詩語、傑出した詩語などと言うものは、心身をふり立たせる観念の発見出来た後に、自ら生じるであろうという立前をとっていた。が新しい観念の発見などと言うことは、そんなに簡単に、殊に私の微力を以てなし得るものでないから、私の仕事の成果が常に志とちがひ、目もあてられぬお粗末なものになり、編集者読者の輕蔑的となったことは、想像にあまることであろう。

に、引写的にあらうと言ふと、人々は恐らくはあいた口がふさがらぬに違いない。

私などの社会的心理の目ざめは、学校、青年団、軍人などの制服というものの対する反感からはじまった。駅の出札、役所、銀行の窓口の不親切さ故に、官吏諸君のストライキに対する同情も、いくらか鈍らされる。もしもかかる虎の威を借る狐のこけおどかしが、いくらかでも吾々の中にあつたとしたら、それこそ何よりもさきに批判さるべきものであらう。

彼等は毅然としている、物に動ぜぬ。不安を色に出さぬ。それは外目からは、頼もし気に見える。組織の中心部は、まずこう言う頼もし気な人々を以て、固めようとする。がこう言う頼もし気な人々が、如何に実際頼み甲斐がないか、如何に恰好ばかりにすぎないか、ちよつと押しただけで、ガラガラ崩れるものにすぎないか、それを私は見せつけてやろうと思ふ。

彼等は体裁をつくり、そりくりかえり、威張りかえる方法による。が私はわざと、彼等の前でひっくりかえり、とんぼがえりをし、恥部を開いて見せる方法による。難壇の内裏様のように、彼等は一番上の壇に、台座をいくつも積みかさねることによって、彼等の権威を高めようとする。ところで、その二段下にあぐらをかき、半ば内裏様の方を見上げながら、嘲笑的な笑いを送っている五人囃しの一人として、私は彼等に対する。

私は彼等の後生大切に引つかかえているものの値打をみとめぬ。それを引つかかえることにより、安心して彼等の気持を許すことが出来ぬ。しかしそれは何よりもまず、私自身の権威をみとめぬ。私が私自身を引きずりおろし、土足にかけ、思ひのままに踏み

にじりたい気持から出ていることを、人々は知るであらう。

こう言う私のやり方は、今後とも人々の軽侮を招くに違いない。私の詩壇的な地位などと言うものを、いつまでもたつても安定せぬものにすることに違いない。が私は何も政治家になろうとしたり、運動の指導者になろうとしたりして、私の生活を始めたわけでないとするならば、外ならぬ詩人として出発したのであるとするならば、私の生きつづけて行くことは、ますます私の本性を露骨にすること以外にないに違いない。この私の心中の哀しさを、人々は知るであらうか？

〔付記〕 このエッセイは一九五〇年頃に書かれた。当時、秋山清が発行していた第二期『コスモス』のために寄せられたのだが、『コスモス』が出なくなり、長く秋山の手もとにおかれていた。秋山は、『官尊民卑』（戦後詩の私的な回想）——はじめ第三期『コスモス』に連載、のち同じ題名で単行本として刊行）と題するエッセイのなかで、この秋山の文章を紹介している。ぼくが田木を知ったのは、この秋山の紹介を通じてであり、このエッセイの全文がまだ一度も公にされていないことを惜しみ、あえて旧稿の発表を筆者に懇願し、承諾を得たのである。

約二十年前に書かれたこのエッセイを読む読者は、変わったのは、いたずらに公害と呼ばれる文明病を蔓延させる社会の表皮だけであり、その深層の意識構造は、牢平として微動だしていないことを痛ほど感じるにちがいない。六十年代の「激闘」は、ヒナダンの顔触れに多少の変化を与えたかもしれないが、ヒナダンの構造そのものは、新鮮な顔触れを迎えて、かえって逆に強められてさえているようではないか。

（編集者）

《アナ・ボル論争D》

文学のアナ・ボル論争 (一)

秋山 清

でも、一応、輪郭を語らねばならぬ。」（傍点筆者以下同じ）

ここには、すでに明らかに共産党指導下の共産主義者によるプロレタリア文学のみが、プロレタリア文学とその運動であるという主張が明確である。この見地から日本文学の中におけるアナキズムの文学主張とアナキストの文学とが、どう扱われているかを検討する必要がある。

右の報告書の第一章第三節には「社会主義小説の段階（一九〇四—一九一〇）という個所があつて、以下のように書かれている。

「——一九〇五年のロシア革命の影響は深刻に日本に行き渡つて、鉱山地方に幾多の大暴動のストライキを続発せしめるに至つた。以上の社会情勢の中にあつて、日本の『社会小説』は遂に『社会主義小説』にまで発展した。

しかし、其の内容は、まだキリスト教的社會主義、ブルジョワ民主主義、無政府主義、テロリズム、虚無思想、或は自然主義運動の要素をも混在せしめたものであつて、唯物的社會主義の思潮は微弱であつた。これは当時の日本のプロレタリアートの階級的

「プロレタリア革命作家、第一回国際大会における日本プロレタリア文学運動についての報告」（松山敏）というものがある。これは一九三〇年（昭和五）のハリコフ会議に提出された、勝本清一郎と藤森成吉の作成にかかわる報告といわれ、共産主義文学のみがプロレタリア文学であつて、それ以外はプロレタリア文学（真正の）とは認めぬという立場を強固に主張していることで、省みるべき意味をもつものである。それを明らかに示しているものとしてこの報告の「序」が存在する。

「厳密に云うと、日本に於けるプロレタリアートの真に組織的な文学運動の基礎が確立したのは、一九二八年三月であつた。この時、日本に於ける革命的プロレタリア文学運動の正統の唯一の担当者たる日本プロレタリア作家同盟の直接の母体である全日本無産者芸術連盟（ナップ）が組織されたのである。この時以前の運動は前史時代に属し、以後の運動との間に、大きな意義と段階の差違がある。しかし海外の同志たちには、日本の事情があまり知られていないと考えられるので、我々は、この前史時代につい

成長の未発達のためである。そしてこの時期の終りには、それまで主導精神であったキリスト教的社会主義思想が、次第にアナルコ・サンジカリズムによって置き替えられるに至ったことは最も注意すべき現象であった。

またこの第二章は一九一〇年―一九一七年を「沈滞期」としてとらえて、次のような叙述がある。

「アナルコ・サンジカリズムが支配的思潮に成り始めようとした時に、一九一〇年『××××××××するテロリズムの陰謀』という事件が、支配階級の『××』によって、でっちあげられた。日本プロレタリアートの上への封建的勢力による大弾圧が始まって、日本プロレタリアの文学の源流も、一時地下に沈滞しなければならなくなった。そして沈滞したままで、一層アナキズムの傾向を濃厚にした。

日本のブルジョワ文学の領域ではこれよりさき一九〇〇年から一九一〇年までが自然主義文学運動の急速な発展の時機であって、一九一〇年以後にはそれに対立する、ネオ・ロマンチズムと人道主義の運動が育っている。特に後者は次期のプロレタリア文学のための温床ともなった。」

ここに、報告者の非主体性的性格を早くも私たちは見出す。たとえば、日露戦争後の日本に起った労働者の各種のストライキ、それがロシアにおける一九〇五年革命そのものの影響のためでのみあるかのような媚態である。それから「唯物的社会主義」とアナキズム、テロリズム、ニヒリズム等を重ならぬもの、反発するものとしてのみ叙述したこの歴史的な日本文学の理解も浅薄すぎるではないか。したがって、幸徳らの大逆事件による弾圧のために日本のプロ

レタリア文学の源流が一時沈滞しなければならなくなり、その沈滞の下で、いっそうアナキズムの傾向をつよくした、などと、あまりにこの報告は、ソビエトにおける文学者の国際会議において、外国人にたいするものであったにせよ、日本の歴史的現実からはなれずきている。さらにもっとはつきりさせておかねばならぬことは、一九一〇年以後の「ネオ・ロマンチズムと人道主義」のうちの後者がプロレタリア文学の温床となった、ということについてである。後のプロレタリア文学の政治的従属による非文学的性格はここに端緒しているといえるだろう。いや、そのような文学的立場に在る者であるが故にかかる主張は為されたのであろう。まして大逆事件以後の冬の時代の文学が、アナキズムの傾向を濃厚にしたなどとは、意味もしかとは判然とせぬ解説である。

この「沈滞期」を一九一〇―一九一七年、と限定することによって彼等は大きなミス、意識的な歪曲をなし遂げ、日本の民衆にたいし、また文学者の国際会議にたいして、日本の文学と思想の歴史を誤まらせている。

大杉栄と荒畑寒村が一九一二年(大正元)九月に創刊した『近代思想』の存在が、この報告から完全に抹殺されていることを見逃してはならない。そうすることによって、つまり『近代思想』とその日本の文学にたいする大正初頭の影響を抹殺することによって、この時期を沈滞期としてのみ語ることにいっそう正当性をいっそう權威づけようとしている。

この国際的な報告書が、大正の文学運動のなかではほとんど見落すことのできない『近代思想』の存在とその影響を、埋没ではなく、無視したということを、プロレタリア文学に関する見解としてこれ

を明らかにしたのも、詰問したのもこれまではなかった。大逆事件によって冬の時代の到来を告げること、その次の活動の時期の幕をひき明け、思想と文学に反抗的展望を与えた大杉、荒畑の努力を無視した報告書は、その無視において特筆さるべき性格である。このことはその時点におけるものみの欠落ではなく、かかる意図がこの報告の全般に亘っていると見てまちがひもあるまい。ネオ・ロマンチズムと人道主義をこの沈滞期の文学の特徴とし、その前者に触れず後者の発展に、次期のプロレタリア文学運動の芽生えがあったとすることは、やがてその一線の上に、政治的指導方針に順従する文学の生誕を重んじ、ロマン主義の自由眺望の文学を全否定することのおそれも潜んでいる。そして『近代思想』の無視と、この人道主義の重視、ロマン主義の忘却は一脈相通じ、アナキズムからの否定的批判を先どりするかの如くである。

第三章を「再生期」(一九一七―一九二三)として、この時期のデモクラシーと重なる民衆芸術を取りあげ、この中に「トルストイ流の人道主義」と「無政府主義」もあった、という止むを得ないかのような報告があるが、明らかにここに、一九二一―一九二四年の『近代思想』とそれに先立つ二カ年半の『白樺』とを一括し、しかもこれは後のプロレタリア文学には至らぬものであるという記述に止められている。民衆芸術・労働文学の時期を略記しつつ、ひとえにマルクス主義文学の前哨の役目を背負わせるというのが、このあたりの記述の精一杯のところとなっている。にもかかわらず興味津津たるものが一九二一―一九二三年の段階、雑誌『種時く人』の時期についての記述にある。

「なお当時の政治戦線に於ては、一九二二年の上半期をもつ

て、アナルコ・サンジカリズムの絶頂期が終り、後半期には経済闘争に『方向転換』して行こうとする運動が支配的となった。且つ、一九二三年には第一次日本共産党に対する総検束もあった。かくしてサンジカリズムとボルシェヴィズムとの対立、分離が決定的なものとなる。従って文学運動に於いてもこれに少し遅れて、同様の対立をはらみ、遂に一九二三年九月一日、東京地方の大震災をもって、とつぜんこの形勢が中断された。

すなわち以上の再生期を通じて、アナキズムの思潮が支配していたプロレタリア文学運動に遂にマルクス主義の傾向が盛りあがって来て、前者と対立し、大きな対立のまま不意に幕を閉じた訳なのである。」

いかにももつともらしく、そして無責任な記述である。大正のはじめまる二カ年に亘る『近代思想』の活動を無視しておいて、この「再生期」即ち一九一七―一九二三の間に「アナキズムの思潮が支配していたプロレタリア文学運動」なんてことを書く。

一九二〇年(大正九年)の社会主義同盟は広義の社会主義戦線、むしろアナ・ボル対立の表面化を一時きひきのばしたものである。その翌年には労働運動社におけるアナ・ボル共同戦線の時期を経て、しかし文学活動はなお対立抗争よりも、共同戦線によって反社会主義と対抗していた時期なのである。

すこし急ぎすぎるかもしれないが、私はここに一つの問題を提出したい。

それは私もまた、このすぐ前の記述において「文学のアナ・ボル共同戦線」ということをいった、がそれは正しくアナ・ボルの共同戦線であったのか、ということである。政治闘争においてアナキズ

ムとボルシェヴィズムの対立が熾烈であった時に、文学の上にアナ・ボル共同戦線というものが可能であり得るか、という問題として成立しないものか。

このとき問題になることは、『近代思想』によって大杉栄が提出した「生の拡充」「生の闘争」の問題である。生の拡充・創造という、より根本的な思维のなかに芸術的創意と行動も当然含まれるという考え方はそのとき、どうなるのか。このことを究明することによって、たとえばこの「国際大会における日本プロレタリア文学運動」の報告における文学の共同戦線と対立抗争の問題とこの考え方は根本的に逆転せしめられるであろう。

文学における共同戦線は現実には一九二六年九月まで存在した。それは一方からはマルキシズム文学者らの無気力、他方からはアナキストの文学観に於ける奇妙な成行であったのかもしれない。

アナキストがボルシェヴィキと対立する場合、介在する争点は「政治」においてであった。しかし文学の場合は「文学」においてではなかった。この場合もまた対立の焦点は「政治」であった。

アナキストにとって、政治と革命のために文学が奉仕するという姿はナンセンスである。アナキストにとって文学は、より文学であり、より人間の文学であることが文学の問題であった。であるとすれば、文学においてはボルシェヴィキとも、社会民主主義とも、ヒューマニズムとも共同し協力は可能である。文学の政治への従属を非難するとしても、それは文学の問題でのみあって、文学を政治の下僕とすることを主張する以外のこと、作品の批評と鑑賞の芸術的問題では、ともに在ることが可能である。なければならぬ。

このことが、一九二六年まで『文芸戦線』の同人としてアナキス

トが在り、外からの協力もまた可能であった所以である。アナキストにおけるロマンチックな主情性を革命文学の運動につながらずとし、人道主義をそこにつながるものと評した「報告書」の沈滞期についての記述は、ここに関連して来る。人道主義、社会民主主義、マルキシズムという発展段階のみが、政治的文学の道につながったと見ることはあまりにも見え透いた道理だからである。それはここ数年來の学生・労働者の前衛活動を、それが直ちに議会と議席につながらぬはねかえりだと見る、後退的な革新政党の見解とそっくりである。

そしてこの「報告書」の最大の欠点は、文学（芸術）運動の報告として、欠落すべからざるものを欠落しているところにある。それは何か。直接に政治、政党、議会、投票のいずれかにつながるものを、芸術文学の活動として捉えることのできなかった無能力にある。それは、第三章「再生期」、第四章「再沈滞期」の叙述のなかで芸術前衛の活動報告をまったく忘却放棄したことにある。

いくつかのプロレタリア文学史は、前衛芸術の無視、蔑視による欠陥の大きさをほとんど顧みていない。そのことは、インテリゲンチヤを雑階級あるいはプチ・ブル階級と見ることによって、プロレタリア階級の下僕的扱いにし、その芸術活動をも同様に軽々しく扱うところからその欠陥を到来した。すなわち革命芸術と芸術革命の問題を避けて通ったことであり、避けて通る理由として否定的態度を打出して責任の回避をあえてしたのである。

さらにつけ加えるならば、そのことは芸術文学における方法論の無視を、政治イデオロギーで間に合わせたこと、間に合わせ得ると考えたことである。文学と芸術がブルジョア階級のイデオロギーの

代弁であるとして軽んじながら、プロレタリア階級の代弁にしかすぎない文学を流布するという自家撞着をあまりにみごとに実践してしまつたということである。このとき、文学が特定の階級の代弁となることの非文学的性格を重視せず、特定階級性格をのみ問題としたことの誤りを、この国際報告書作成者と彼らを代表とした日本のプロレタリア運動団体は、忘却してしまつていたのである。いや忘却ではなく、これを正当だと思つていたので救いようがなかったのだといふべきであらう。

思い出してみるがいい、高橋新吉による詩集『ダダリスト新吉の詩』の出現なくして、また雑誌『赤と黒』による日本の近代詩の否定なしに、プロレタリア詩運動が成立し得たであらうか。新しい思想詩想を盛るべき革袋なくして、無産階級の反抗的な詩と革命精神の詩的絶叫が生れ出ることが出来たであらうか。所謂ナツプ派に属した詩人たちといえども、その出発の日には、何程かこれら前衛的詩人の叫びに触発されているにもかかわらず、その方法的破壊作業の歴史的な意味を、とことんまで自我化して葉籠中のものとするとなしに、政治的課題を追い求めようとしたのが、プロレタリア詩人らの作品である。中野重治にしてすら、当時の前衛詩にたいして次のようにしかいふことができなかった。

「私はまたいわば叫喚詩派あるいは騒音詩派とも称すべきものをしばしば見せられている。それは常に街頭であり自動車であり首であり血みどろであり売淫であり爆弾であり革命でありやけくそであり、ドタン、バタン、クシャッ、ギュー等である。それはどうにも我慢のならぬ気持ちであり黒い虚無の風穴である。そしてこれらのいずれもが、それ自体には全然無産階級的な

い。」（詩に関する断片）

詩誌『赤と黒』が出たのは一九二三年一月、この以後に輩出した前衛的詩誌その他の文学には中野が指摘したような、時流に投じすぎて鼻もちならぬまでの、必然性欠如の、ただただ奇をてらつたといわれても止むないほどのものもたしかに多かったが、にもかかわらずわれわれは、その時点に在って彼等が果たした、古き形式の破壊という作業の意味を重く回想しなければならぬ。

後にナツプに抱合されたプロレタリア詩人の詩が、そのいうところの政治的課題を別とすれば、詩のポリウム、詩の革新性、リズムの躍進性、等々において見るべきなく、旧態依然として大正十年前の民衆詩派と距たるところがなかったという事実の上に芸術の様式革命と革命の芸術とが二にして一、であるという芸術の本質の問題に思いを致さねばならないことを痛感する。小説、戯曲においてもまた然り。絵画、音楽、演劇もまた軌はまったく一つである。ダダ、表現派の過程を経ずして現在のそれらは在り得なかつたであろう。これをイデオロギーの問題ではなくして、芸術・文学それ自体の発展として捉えるならば理解ははるかに自由であらうのに。

このような欠陥は何から生れたか。

マルクス主義のプロレタリア階級文学におけるヘゲモニー掌握のあまりな政治的過程を、プロレタリア文学への発展過程としてとらえることを使命としたこの国際的報告書の、定められた公式的使命のためである。文学芸術の歴史をゆがめても、というまでのかかる態度をかえりみると、この報告書を読む者の責任として、この同じ性格——方針に基づく歪曲を当然発見しなければならぬ。またその歪曲を適確に知ることによって、文学におけるアナキズムの立

場、アナキストの文学の在り方をしだいに明らかに為し得る方向をわがものとするを考え得るであろう。それこそがわれわれにおける「アナ・ボル文学論争」という問題提起の責任となるであろう。

すでに私は三つの問題を、この国際報告書を読みながら提出したつもりである。

一つは、大正の初っぱなの時期における『近代思想』とそこに提出されていた文学的主張の無視、二つには共同戦線の問題、三つには革命芸術運動における芸術革命の問題である。プロレタリア革命作家第一回大会において、国際的にかかる報告書を提出したことによって、これらの問題についての責任を彼等は背負ったのである。その責任に彼等は如何に応えたか。それは無視、素知らぬ顔、避けて通る、という各様の、そしてそれぞれに無責任な方法において応えたかのごとくである。あるいは政治に文学を下僕せしめる立場として、すでに十分応えたと思惟するものであるかもしれない。

それがそうでなかった旨を明らかにするためには、さらに「報告書」を国際的に読まねばなるまい。

その「報告書」第五章「勃興期」の第一節に「アナ・ボル分裂の段階」という個所があり、次のように語られている。

「雑誌『文芸戦線』が復活されて五年後、一九二五年十月『文芸戦線』のグループを中心にして、プロレタリア文学運動のための共同戦線団体として『日本プロレタリア文芸連盟』が創立された。しかし今や問題は、アナキズムに対する闘争の上にある。政治戦線の方面では、この問題はすでに解決されて終つていて、日本共産党の再建運動はますます具体化し、一九二五年九月以来

、

人たちが連盟から脱退して別に『労働芸術家連盟』を組織した。

一方、日本プロレタリア芸術連盟は新たに機関紙『プロレタリア芸術』を創刊し、つまり、雑誌としては『文芸戦線』と『プロレタリア芸術』、組織としては、労働芸術家連盟と日本プロレタリア芸術連盟との対立期に入る。」

この報告が、勃興期の条件として「アナ・ボル分裂の段階」を叙していることは興味深いところである。一九二六年に、ようやく広義のプロレタリア文学の発展過程を終つて、日本のマルクス主義が文学運動のヘゲモニーを掌中せんとする時機を迎えたという意味において、このあたり意気軒昂たるものが見える。

この一年前の十月に萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』が出て視聴をあつめていた。この詩集はアバンギャルド芸術運動の文学におけるものと美術におけるものとの総合的成果といつていいほどの、またその結節点でもあった。一体アバンギャルド運動を単に芸術様式の変革的活動とのみとらえようとしたことにはある大きな過誤がひそんでいゝ。様式の革命それ自体は前代の表現形式にたいする革命として顕現するものであつても、芸術の革新を顕現する芸術家自身の内部には、前代につづいて即ち現在を支配するイデオロギー、それを確立している権力に支えられる国家その他の体制、を否定する立場から発して、その現代の安定権力を支持し協力する政治、道徳、芸術から生活感情までの一切に反逆する精神の激するものが在るのでなければならぬ。萩原の『死刑宣告』という表題の意味するところは、その前代のものの抹殺を意志することの宣揚であつた。まだ労働者農民の階級的覚醒が弱く、その組織も協力もまだ強力とはいえない時期の、インテリゲンチヤの一詩人による芸術的代弁とも

『無産者新聞』も刊行され始めていた。かくして翌、一九二六年十一月に至り、遂に日本プロレタリア文芸連盟は、アナキスト一派の除名を決定し、且つ連盟自身も『日本プロレタリア芸術連盟』と改称し、内部に文学部、演劇部、美術部、音楽部の四部を持つに至つた。この分裂によって、連盟は少しも動揺を受けなかつたばかりか、かえつて強化、拡大された。

この分裂を指導した芸術運動の理論は、プロレタリア芸術家が非政治意識にとどまり、自然成長的な観方と気分の中にこびりついている傾向を否定し、マルクス主義的目的意識によって導かれねばならぬことを規定したものであつた。この理論は、日本プロレタリア文学運動が意識的、組織的な運動の段階に這入るために重大な役割を持ったものであつた。

かくして日本プロレタリア芸術運動の組織は、これまで共同戦線であつたものから一路、マルクス主義に立脚する芸術団体たろうとする方向へ向い始めたのである。」

つづいてその第二節は「セクト主義の段階（一九二七）」としてこういつている。

「日本プロレタリア芸術連盟にとって、アナキストの除名を成し遂げてから後の問題は、連盟内の社会民主主義的分子との闘争である筈だつた。ところがこの問題が日程にのぼる前に、同じ政治指導下に於ての混乱動揺、分裂を経験せざるを得なかつた。

これは一九二六年の末に再建組織を完了した当時に於ける日本共産党の指導理論が、セクト主義の傾向を持っていたための欠陥による。

かくして、一九二七年六月に至り、雑誌『文芸戦線』の編集同

いふべき出来ごとであつた。

その芸術的発現と階級的覚醒とプロレタリア文学団体の前進とはそれぞれの場における足並として、はるかに歩調が揃つてゐるはずのものである。アナキストの芸術的仕事として萩原の詩集刊行は、アバンギャルド活動の大正末における集大成であつたのである。何故に、中野重治の「詩に関する断片」におけるように、否定されなければならぬのであるか。

それは明らかに文学・芸術の問題としてではなく、政治の問題としての否定に他ならぬ。

公式は至つて簡単である。プロレタリア階級が資本主義社会の次の担い手である（なければならない）とすれば、プロレタリア階級者以外の出身者はその階級的立場をとるもの、すなわちボルシェヴィキ的立場に倚る者にあらざしては、その仕事も業績も名声も否定するから、安く値切るか、出来ることなら評価の埒外に置かねばならぬのである。中野重治はその詩についての意見で、一たび叫喚詩派——騒音詩派を無産階級ではないといつて否定しながら、「必ずしも捨てないであろう——それは『新しい形式への探究は実にあらゆる革命のダイナミズムに対する偏愛からである』からである。そこには常に車輪を前方へ押し回そうとする熱意が些少なりとも見出せるからである」といって、じつに幽切れるく、まことにひそかに肯定の一石を投じている。この首尾分裂の見解のなかに、たしかに政治と文学との対立、政治と文学の価値的相剋がある。

文学におけるアナ・ボル論争とは、ここでどうやらその正体がおぼろげに見えてきた。じつにそれは、芸術と文学のための論争ではなく、文学を政治の下にいかに従僕たらしめるか、たらしめぬか、

革命と階級闘争の名目の下にのみ文学が在り得るか否かの問題として存在するものである。だから将来に向けて拡大的に存在する問題の、その追及の問題として、新しくもあり古くもある、問題なのである。

アナキストとマルキシストが文学者として一雑誌に同居し、共同戦線などといって和気藹々としてやって来られた時代があったとすれば、その時彼等は、また我々も、文学を考え、文学を論じていたからである。文学を文学として追及するのでなく、文学をして独立せしめず、一階級の階級的政治指導下に緊縛性を要求されたとき、文学もまた文学者・詩人たちも、アナ・ボルに對立し、抗争するの止むなきに至った。その直接の転機として表面に現われたものは、青野季吉の「自然成長と目的意識」論であった。この論文が発表されたのは一九二六年九月の『文芸戦線』であった。要点はこうであった。

「プロレタリアは自然に生長する。これが自然に生長すると共に、表現欲も自然に生長する。その具体的頭れの一つがプロレタリア文学である。プロレタリアの立場に立ったインテリゲンチヤが出る。詩をつくる労働者が出る。――いずれも自然に生長して来る。」

「しかしそれは自然に生長したままであって、まだ運動ではない。それがプロレタリア文学運動となったのはその自然生長の上に、目的意識が来たからである。目的意識のないところに、運動のあり得る筈はない。」

「目的意識とは何であるか？
プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めること

この論文がレーニンの「何を為すべきか」の翻案、いや借りものにすぎないことはひろく知れたこと、文学とは何を如何に書くか、という文学本来の問題ではなくして、プロレタリア文学運動は何を目的として如何に組織すべきか、のみの考察であることは、前記引用によつてはつきりしているが、さらに翌一九二七年一月号の『文芸戦線』に再び青野が書いた「自然生長と目的意識再論」においてそのことはいっそうはつきりしている。

「私は自然生長のプロレタリアの文学では仕方がないといつた。――諸々の混入せるイデオロギイが排除されて、真のプロレタリアの不満や、憤怒や、憎悪が、その赴く可きところへ赴くのは、決してそれらの感情の価値の引下しでもなければ、その稀薄化の要求でもないと思う。」

「私は、レーニンが説いているように、プロレタリアの自然生長には、一定の局限があると信じている。プロレタリアの不満や、憎悪は、そのままで放置されては決して充分に批評され、整理され、組織されるものではない。即ち社会主義的意識は、外部からのみ注入されるのであると信ずる。我々のプロレタリア文学運動は、文学の分野で、その目的意識の注入運動であると私は信ずる。」

かく青野がいった通りに、私もまた、文学の運動ではなく、政治的目的意識の注入運動を青野の主張は主張しているのだと思うしかない。

そして現象的には集団から排除されたアナキストの敗北は、その受けた処置によつてますます明瞭となったが、むしろ青野の目的意識論によつてアナキストの文学的覚醒を得たものは、アナキスト自

は、それだけでは個人的な満足であつて、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的な行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級の目的意識によつて導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてここに始めて、プロレタリア文学運動が起こるのである。」

「プロレタリア文学運動は、それであるから、自然発生的なプロレタリアの文学にたいして、目的意識を植へつける運動であり、それによつて、プロレタリア階級の全階級の運動に参加する運動である。」（傍点筆者）

この青野季吉の有名な論文の主旨によつて、『文芸戦線』の同人であつた村松正俊、松本淳三その他当時のアナキストはこの共同戦線の場合から排除されることとなった。同時にまた、新居格、宮嶋資夫、小川未明ら、ながらく『文芸戦線』に協力し、執筆してきたアナキストたちも協力することを止めた、止めさせられた。また、国際報告書に書かれていたように、「日本プロレタリア芸術連盟」は、アナキスト一派の除名を決定したのであつたが、その除名の直接手段が如何なるものであつたかを、今はつまびらかにしない。だがあえてその必要もあるまい。一九二五年十二月に『文芸戦線』を核として共同戦線団体として結成された日本プロレタリア文芸連盟から、如何にアナキストを排除するかを課題として、前記の青野季吉の論文が書かれたことは、明瞭である。青野のこの論文は文学論ではなくして、まったく寸尺のみじかい政治論文にすぎなかつたが、その政治論にすぎないものが一つの役割を果し得たのは何故か。私は思う。それは政治論であつたが故のことである。

身たちであつたのである。

文学運動にはなお共同戦線が可能であるという正当な考え方が、政治的に否定されざるを得なかつたという現実、この政治的現実のなかで、「文学」の在りかたを考えることを強いられることによつて、アナキズムそれ自体についても、ルーズな理解から前進せざるを得なかつたのであるから。ようやく人のいい日本のアナキスト文学者たちは、政治と文学の対立、政治の文学との絶対的異質性を身にしてみたのである。

ようやく本当の対立の時期に至つたといわねばならぬ。またようやく論争が本格化されねばならぬ時を迎えた。

集団としての文学者の組織内では協力も可能であり、対立は十分尖鋭とはなり得ない。ようやく、アナキストは自主的集団を結集する時を迎えたのである。ひろく左翼的文学者集団として、ヒューマニズムを根底として、その根拠によつて協力してきた日本の社会主義文学者が、「政治」を挟んで、対立すべきものが従来協力していた、そのアンバランスを自他の上に自覚せざるを得なかつたということである。

文学のアナ・ボル論争が現実的抗争の時を迎えたのである。

一九二六年十一月に日本プロレタリア芸術連盟から離脱した後のアナキスト文学者たちの活動の表面化は、翌一九二七年（昭和二）早々からである。（つづく）（一九七〇・四・一〇）

×

×

×

×

切拓かれた思想的緑野

——大沢正道『反国家と自由の思想』評——

蓮台寺 晋

アナキズムが極端な中傷と誤解のなかで葬られ、非難と呪詛の言葉であった時代は、どうやら過去のものとなり、求めさえすれば、過去の基本的文献は比較的容易に入手できるようになった。しかしながら、いわゆる「アナキズム・ブーム」は、皮肉なことに、主体アナキズム側の決定的無力を曝け出す結果ともなっている。

今日のアナキズムに対する関心の急激な高まりは、歴史的再評価といった性質のものでは決してなく（もちろん、それも伴うが）、すぐれて実践的な要請から生まれたものである。もはや、まずなによりも解説書や古典が必要であった段階は過ぎ去り、真に求められているのは、現代に生き、現代に反逆するアナキストの真摯な思索であ

り、運動なのだ。しかしながら、それに応えるべきアナキストの著作は皆無といっても過言ではなく、このような認識すら十分とは思われないのである。

そうしたなかで、ようやく大沢正道氏の『反国家と自由の思想』が刊行された。戦後、一貫してアナキズムに主体的に取組み、近代アナキズムをのりこえようとしてきた氏の主要論文を収録した本書は、まさに待望の書といえよう。

革命思想論の意義と限界

さて、本書は、序章を含め六つの章から構成されているが、革命思想を論じた前半（Ⅲ章まで）と、それをふまえて組織論・国家論が展開される後半とに、ひとまず分

で内実の異なる「アナキズム」という幻想のうへで論議を繰返すのは、まったく消耗である——と日頃から考えていた評者にとって、大沢氏のアナキズムあるいは革命思想の把握は、率直に共感できるものであった。

このような把握を前提として展開されている前半は、おそらく、伝統的な枠組みを取りはらった後に、理論を生み出す母体として、理論構築の方法、方向を示唆するものとして、共通の基盤となりうるものである。Ⅱの「社会主義における自由の復権」は、マルクス主義との緊張関係のなかで、従来のアナキズムの自由論を整理し、論理的に展開した説得力のある論文といえる。また、「伝統的枠組みの解体」とならんで、Ⅳ全体革命、Ⅴ遊戯の復権が、今後の我々の課題となることも間違いない。

しかし、このアプローチは、革命思想を外から現象的にとらえ、その理論を直接的対象としないことによって、むしろ、従来の革命思想の視野の狭隘さを突破しえたのであるが、反面、それ故の限界があることを忘れてはなるまい。例えば、二一頁の前衛批判はそれだけでは十分でないし、近

類することができよう。

前半は、「革命思想それ自体が、革命を要請されているという逆説的地点に、ここにち、われわれは立たされている」との認識から出発して、革命思想の再検討にとりかかっている。

そこできわめて特徴的なことは、（私が革命思想論と呼ぶゆえであるが）著者のアプローチの方法で、いわゆる左翼の論文とは異なり、革命思想の源泉、発想、展開、現実への適用のしかた、等が主に論じられていることである。この方法が、きわめて正当なアナキズム理解を可能にしている。

著者によれば、産業Ⅱ科学革命へのアンチ・テーゼとして立ちあらわれ、学生、黒人、第三世界を先駆として、自然発生的に噴出して「大衆的反乱を支え、これを普遍化していくイデオロギー体系の構築が、緊急の課題」なのである。その構築へ向けての試行錯誤のなかで、トロツキズム・アナキズム等が呼びもどされているが、それらは参考資料にすぎず、大衆的反乱の現実が激しく要求しているのは、「人間の全体性の全体的実現」をもたらしつつあった新たな理論であり、イデオロギーなのであ

る。そのためには、伝統的なマルクス主義やアナキズムの枠組みを解体して、「現代における革命の問題をとらえ返す大胆な試み」が必要である。しかしながら、「この人間の全体性の全体的実現を全面的に阻んでいるもの——それが国家」であり、それ故、「新しい革命思想は、国家の全面的否定、すなわち、アナキズムあるいはリバタリアニズムとかつて呼ばれた思想と基調を同じくせざるをえない」、というのである。

今日、いまだ萌芽状態にあるとはいえ、各地に急速に生成しつつある新たなアナキスティックな様々な運動は、もはや戦後アナキズム運動の延長線上にあるものではなく、両者の間には、明らかに質的断絶があることを確認しておかなければならない。戦後アナキズム運動が、主観的にはともかく、運動としては、すでに破産した近代アナキズム運動の延長以外のなにものでもなかったのに対し、若き世代の新たな運動は、むしろスターリン批判以降の新左翼—反スターリン主義運動の一つの帰結とみなすべきものである。この決定的ともいえる位相差を認識せずに、新旧世代間

代アナキズム批判もロシア革命・スペイン革命の総括なくしては十分な説得力をもちえない。とくに、スターリニズムを「部分的変革」における保守主義の最高の表現とするあたりは、その限界を感じさせる。（著者は承知のうえだろうが）、革命思想論は、大筋を導くガイドにすぎず、核心を衝くには、内在的検討と既成イデオロギーないし運動との緊張関係がより一層必要であろう。

組織原理論への下降

Ⅳの「組織論の革命」は、組織論を「プロレタリアートの自己解放の理論」という観点をめぐって論議され実践されるべきものとしながら、その根源にまで遡って考察を深めた力作である。

著者は、まず、伊藤整、佐々木基一以来の「組織と人間」をめぐる論議を整理し、スターリン主義の捏造のフレームを打破したものであると黒田を評価し、さらにその限界を突破するものとして、マルクス主義を相対化し、「あれは敵だから殺せ、殺さなければ殺される」という従来の指導原理に代えて、「敵と思われたものが味方とな

る」という新たな指導原理を呈示し、△組織善▽という大胆な仮説を提起した。埴谷を高く評価している。そして、それらのなかから、「人間を組織の方へ収斂していく傾向」と「組織を人間の方向へ収斂していく傾向」を抽出し、それぞれ、△組織のなかの人間▽と△人間のなかの組織▽としてモデル化がなされる。しかしながら、「問題は△人間のなかの組織▽か△組織のなかの人間▽かという二分法によって裁断」できるものではないのである。

著者によれば、「現実主義と理想主義との矛盾葛藤、拮抗が作りだす緊張―弛緩の關係こそ人間の実相であり、同時にまた組織の実相である。緊張（破綻）において、実相は生きた相貌を呈し、弛緩（破綻）において死んだ相貌を呈するのである」。それ故、純粹な△人間のなかの組織▽、純粹な△組織のなかの人間▽は、いずれも觀念としてしか存在せず、「△人間のなかの組織▽は、組織善を随伴するモデルであるけれども、それだけで地球を覆おうとする試みは、実相の弛緩を、すなわち、死んだ相貌をもたらしにすぎない」のである。われわれが追求しなければならぬのは、「ある

一つのモデルの実現ではなく、（それは必然的に実相の弛緩を結果する）、二つのモデルのあいだの緊張なのである」（傍点―蓮台寺）。

大沢氏の組織論は、埴谷のエッセーに多くを負いながら、この「止場の契機をふくまず、永遠の矛盾における緊張―弛緩を自己内容とする弁証法」によって、埴谷の「ヘーゲルの」限界を決定的にのりこえ、未だ展望は定かではないが、新たな地平に画期的一步を踏み出したといえる。

次に、2の△合意による組織と権力による組織▽では、組織には多かれ少なかれ権力が必要である、という命題に対して、詳細な反論が加えられている。著者は△組織▽、△権力▽の定義に遡って検討しているが、結論的にいえば、組織には権力を必要とするものがあり、それは構成員のあいだに基本的利害の相違がある場合なのである。

では、権力によらない組織はなにによって成立するのだろうか。それは、基本的な利害の一致を前提とし、「面識による対話を通じて到達される」△合意▽である、と著者はいう。

△合意▽が面識による対話を通じて到達

されることは、「それが本当に人間性の根底に接続し、そのことによって各人が存在全体のなかに合一されていく保証を手にいれることができる」点で強味であり、「一人の人間の面識しうる数が物理的に制約される結果、組織の規模が必然的に限定されるをえなない」点で弱味である。しかしながら、「権力のもつ恐るべき破壊力に敏感であるなら、そう安直に合意による組織に見切り」をつけるわけにはいかない。「どのような量が增大しても、組織の機能を可能なかぎり分割していくことで、合意を確保しうる可能性がある」のである。

そこで、「現代のマンモス組織は、必ずしも組織の必然によって巨大化し、集中化されているのではなく、むしろ、それが権力の体系の一環であることによって、巨大化し、集中化されているのである」という鋭い指摘は、我々の目を開いてくれるものであった。

2は、アナキストが繰返し説いてきた△自由連合制▽と△分散化▽を理論的に解明したのだが、1に比較するとややスタティックなものに終っている。（最後のグッドマンの引用は、かえって全体の印象を

弱くしているのではないか）。1と2の連

関についても、記述に若干の混乱（？）――私には、一四三頁で、「敵と思われたものが味方となる」を緊張を結果する原理としながら、一四七頁の図式などで△人間のなかの組織▽モデルに結びつけているのは、よくわからない」がみられ、必ずしもうまく噛み合っていないように思われる。

今後の我々の課題は、2の原則的立場に立ち、1のダイナミックな組織の弁証法をふまえた、実践的組織論をいかに構築していくかということであろう。

国家廃絶を望みさせる

国家論の入口

本書は、後半になるほど難解である。Vの△国家――権力による組織の最高型態▽で提起されている問題は、いわゆる国家論の枠をこえてきわめて多岐に渡っているが、あえて私なりに大ナタをふるって整理すると次のようになる。

分業や宗教は、それ自体の発展の様式をもって国家へと発展していくのではなく、別の要因が媒介されることによって、国家のなかへ組みこまれていくのである。その

「別の要因」とは、共同体△実存化の世界

に入ることによって真の人間となりえた人間が、同時に利用体△対象化の世界を創り出すことによって自らを葬ろうとしている、という存在の悲劇的な弁証法にほかならない。共同体は△われ―なんじ▽という超意識を凝集力とするが、分解力△われ―それ▽を核とする利用体においては、利用体が独自の世界を形成しようとするれば、他の凝集力、すなわち権力を必要とすることになる。△それ▽なくして生きていけない人間は、たえず権力の素を生み出しているのである。権力の体系の分岐の基点は、物理的、経済的、精神的強制力にそれぞれ対応する、道具、労働、習俗である。そして、国家とは、これらの強制力が構成する権力の体系すべてを総括した存在の様式にほかならない。「それは、実体的な抑圧の機構であると同時に、人間の存在全体に意味づけと方向づけを付与する価値体系であり、人間の思考や情緒、行動のすべてを規制する存在様式でさえある」。しかし、権力は必要でもなければ、不可避でもない。利用体が共同体の翼の下に収められ、共同体と相互補完の關係を保つとき、無権力社

会、無国家社会が実現されるのである。

以上、私なりに読みとってみたわけであるが、この論文は、じつに大沢国家論の入口にすぎないものといえよう。しかしながら、前人未踏の、いったん足を踏み入れれば、はるか彼方にかすかに出口らしきものの望みされる、たいへんな入口である。

入口にすぎないというのは、本書とその初稿『黒の手帖』4、5、7、8号を比較すれば明らかとなる。大沢氏は、権力体系の形成過程をより緻密に展開し、本書で結論に代えられている部分（三四二―三四四号末尾）をふまえて「現代国家の構造的実態と、その異常な肥大化」を解明し、さらに反国家運動△革命論を展開するつもりであったようだ。

たいへんな入口であるというのは、プーバの存在論を基底にすることによって、一挙に国家の本質に迫り、さらに氏の人間論を媒介として経済的、精神的なものまで含めた権力体系の形成過程を追求することによって、その廃絶の道を示唆しているからである。ランダウアー、プーバーによって比喩的に語られていたものを、大沢氏は、我々にも視ることのできるかなり太

い線で描いてみせたのだ。

しかし、正直のところ、未だ思弁による真理の開示といった印象が強いことも否定できない。例えば、二二二頁の権力による組織の歴史的な形成過程などは、実証的に論証ないし例証する必要があるのではないだろうか。

この大沢国家論の入口ないし略図をより完全なものとするためには、大沢氏に「さらに全体的な国家論を構築」(8号「そえ書き」)してもらうことはもちろん、文化人類学、生物学、歴史学、社会学等々の成果との相互交流が不可欠となろう。実践的理論との関連では、この論文をヒントとして、過渡期論をより具体的に前進させる可能性が開けたように思われる。

戦後アナキズム運動の思想的到達点

ひととおり本書を概観し、若干のコメントを加えてきたわけであるが、本書は、「試論集」と呼ぶにふさわしい新鮮かつ大胆な問題提起にみちた、密度の濃い本である。著者は、「質量ともどもの貧しさ」などと書いているが、世界的にもアナキズム

理論の水準をはるかに抜きこんでた、戦後アナキズム運動の最高の思想的成果といえよう。

戦後アナキズム運動は、六八年のアナ連解散によって名実ともに終焉したわけだが、機関紙活動を除けば組織的にはほとんどなにもなしえぬ、運動と呼ぶにはあまりに微弱なものであった。その内部から生み出された本書がそれによって制約を受けていることはいうまでもない。本書の印象をどこか弱いものにしていく理論レヴェルでの緊張関係(これは編集の問題でもあろう)、現状分析等の不十分性は、著者個人に還元されるものではなく、戦後アナキズム運動が本書に落した影とみなすべきかもしれない。しかし、本書は、すでに述べたように、戦後アナキズム運動の枠を内側から解体する質を有し、枠をとり払った後になお十分に評価されるべきものである。本書に収録された諸論文が、発表当時、アナキズム運動内部でさしたる創造的反応を惹き起こすことができなかったのも、その意味では無理からぬことであろう。

ここで、本書における大沢氏の立場とそれを主体的にとらえ返そうとする我々との

相違を明らかにしておかねばならない。本書は、表題に端的に示されているように、あくまでも思想のレヴェルの著作であり、そこでなされている現状分析を含む一切は基本的に思想に集約されている。これに対し、我々は、可逆的ヴェクトルを保ちつつ、基本的に、思想から理論を媒介として実践へと集約していかなければならないだろう。

我々は、本書をマルクス主義との創造的対話の契機にするとともに、本書の不十分性を克服しつつ、大沢氏によって切拓かれた思想的緑野のうえに、我々なりの実践的理論を構築し、自由連合派の運動を革命的に推進していかなければならないのである(八百円 川島書店)。

付記 本書の後半部分が『黒の手帖』に連載されたことを考慮して書いたもので、書評から先に読む人にはわかりにくかったかもしれない。紹介的書評の意義を全面否定するわけではないが、ここでは評にポイントを置こうとした。重要な問題でふれえなかったものも少なくないが、本書の主体的把握の契機となれば幸いである。